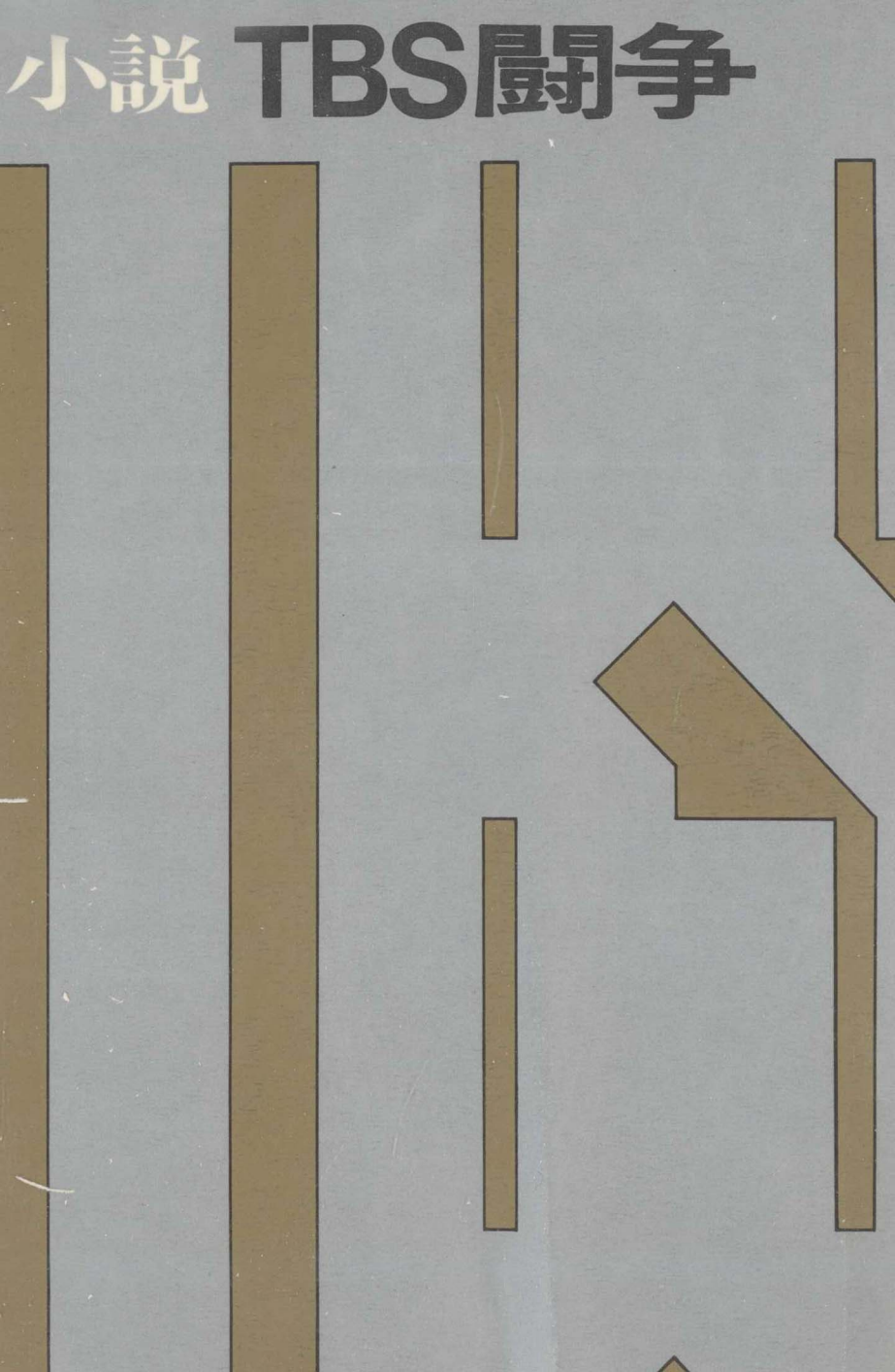
小説 TBS闘争



小説TBS闘争

平田敬

新潮社

小説　TBS闘争

定価650円

昭和四十八年九月五日印刷
昭和四十八年九月十日発行

著者　平田敬
発行者　佐藤亮一
発行所　東京都新宿区矢来町七一
株式会社　新潮社
電話東京(〇三)三二六〇一二一一
〒一六二　振替東京八〇八番

（乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。）

印刷　三晃印刷株式会社　製本　株式会社大進堂
© Kei Hirata 1973, Printed in Japan

小説　TBS闘争

手伝ってくれたSとMとYに
OとAに　そして
もう死んでしまったもうひとりのAに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第一部

「あなたは何故、与党第一党である民主党に所属しましたか」
「私の父が民主党の代議士でしたし、私が尊敬する政治家は、現総裁です」
二十七歳の青年代議士は、一度言い終えてから答え直す必要を感じたらしく、次の質問に移ろうとした女性アナウンサーを手で制した。
「わが民主党は、国民の幸福を最もよく考えている政党であり、また、それを実現して来た政党です」
「党内で、発言力があると思いますか」
「他の一年生議員に比較すれば、あると思います。学生時代から父の秘書として、多くの先輩議員と昵懇の仲ですから」
「あなたが今、もしも総理大臣になってひとつだけやれと言われたら、何をやりますか」
彼は沈黙した。表情は崩さないが、口が開かない。カメラを見返す眼が一二度しばたく。
「ひとつだけ、なんて、いきなり言われても、なあ」
彼はそこまで言いかけてから、改めて答え直した。
「やりたいことは沢山あります。それだけに、ひとつだけと言われても困る」
「十年後に、あなたは何をしていますか」
「政治家です」
彼は即座に答えた。質問が変ったことで、彼の当惑は消えた。やや間を置いて、「大臣になっているでしょう」と言い加えた。
アナウンサーはディレクターの才賀康夫を見た。才賀が肯くと、「どうもありがとうございました」とインタービューを終えた。
一瞬後、部屋に拍手が鳴り渡った。見守っていた秘書たちである。
「十年後に大臣、はよかった」
「先代に似て来た」
「色男だから、うちの先生はテレビ向きだ」
沈黙を強いられた後の昂揚した私語のなかで、若い代議士は才賀に、「ごくろうさん」と言った。機材を片づけて廊下へ出ると、秘書の一人が才賀を追って来て、叮嚀に頭を下げる。
「これからも、こういう企画のある時は、是非うちの先生を出して下さい。よろしくお願いします」

二十七歳の代議士と五十年輩の秘書との間には、ひとつの図式があるようであった。つとめて老成した態度をとり、時には不必要に尊大な代議士と、その背後で過度に腰の低い秘書という組合せである。才賀も叮嚀に礼を述べ、エレベーターロに向ったスタッフの後を追った。

第一議員会館の駐車場で、社のワゴンに機材を積み込むのを見とどけてから、才賀はスタッフに別れを告げた。

「才賀さんは、社へ戻らないのですか」

とカメラマンの唐橋弘が愕く。

「今のフィルムが現像されるまでは、することがないもの。明日の午後からラッシュを見て、編集は夜やろう」

「社へ戻ったら、あなたと少し話をしたいと思っていたのですが」

唐橋は不満そうだった。

「この仕事でかい」

「いや、別の話で、です。明日の朝、あなたの家へ電話していいですか」

才賀が肯くと、唐橋は納得したらしく、ゆっくりとした動作で車に乗り込んだ。彼の話の内容は何か、という疑いが才賀の心を掠める。

唐橋が離れるのを待っていた女性アナウンサーが、「お疲れさまでした」と澄んだ声で才賀に挨拶して車に乗り込む。車は沈みかける夕陽を追って、議員会館からは真西に当る社へ走り出した。

才賀は臙脂色の社旗をなびかせた車を見送ってから、駐車場の外へ出てタクシーを止め、スタッフとは逆に東へ、新橋のロイヤル・ホテルへ向った。夕暮れのラッシュ時であったが、道路は意外に空いていた。日比谷公会堂の横に、警察の輸送車が数台駐車し、俗に乱闘服と呼ばれている黒ずんだ紺色の制服にヘルメットを冠り、光る楯を持った男たちがたむろしている。公会堂の蔭になっている為もあって、暗い無気味な空間が出来ていた。

ロイヤル・ホテルの五〇一号、五〇二号、五〇三号の三部屋は、民主党所属の衆議院議員高梨孝三郎の事務所である。五〇一と五〇二の両室は廊下から直接に入れるが、五〇三号室は殆ど常に廊下側の扉に施錠し、五〇二、あるいは五〇一と五〇二を通り抜けなければ入れない状態になっている。

才賀は五〇二号室の扉から事務所に入り、事務員や選挙区から上京した地方議員らしい男たちの間を抜けて五〇三号室へ入った。米田律子は、陽灼けしていない白い顔を挙げると、それが彼女の癖の、口許を曲げた声のない笑いで才賀を迎えた。

「終りましたか」

「お蔭様でね」
五〇三号室には、米田律子のと、それより二廻り大きい高梨孝三郎との、二組のデスクしか置いていない。彼女は奥のデスクを指した。
「お坐り下さい。今日は本会議があるから、先生は来ないと思います」
才賀が腰を下ろすと、彼女は立ち上って五〇三号室と五〇二号室を結ぶ扉が完全に閉ざされているのを確かめた。彼女のやや病的な秘密主義の現われである。それが、学生時代は都市革命運動を推進していたM派の女性幹部で、今は与党第一党に所属する代議士の秘書、という彼女の経歴から生れた歪みなのか、幼時から持っている性癖なのかは、才賀にはわからない。いずれにしても、そうした癖と低い声が、才賀より六歳下の彼女の小さい顔に、一種の翳りを宿している。
彼女はメモ用紙を一枚取り、女性らしくない大きな丸い字で、五人の二十代の二代目代議士の名を書き並べた。その一人は高梨孝三郎が主宰する派閥に属している。インタービューのなかで、ゲバルトという言葉について正確な認識を示したのは彼だけであった。才賀がそれを伝えると、彼女は声を立てずに微笑した。
「彼は私から仕入れたのです。先週作ったリポートにも、学生問題が入っていたと思います」
米田律子は五〇三号室のなかで、いわば私家版のリーダーズ・ダイジェストを作っているのだった。高梨派の代議士たちは、各種の政治研究会の討論内容から評論・小説に至るまでを、彼女が作る内容紹介によって理解している。政治家が直接に生の形で本を読む可能性は殆どない、と彼女は言う。
「ところで、天皇制については、遂に触れなかったのですか」
「ああ、やめました。担当の副部長がそれだけはやめてくれ、と言いましてね」
才賀康夫が高梨事務所に米田律子を訪ね、番組の狙いを説明して二人で質問を設定した時、現在の天皇制についてどう思いますかという設問を、彼女は主張した。平素考えていない問題だけに当惑するかも知れないし、二十代の青年代議士のなかから思いがけぬ憲法改正の意見が出るかも知れない、というのである。才賀は反対して質問のなかに入れなかったが、二人で作成したメモの上では、彼女の筆蹟で残っていた。社に帰った後、社会部副部長の徳島昭二が、どんなことを訊くんだい、と才賀のデスクに来た時、徳島の眼は果してメモのなかの消し忘れた項目にとまった。
「こんなことを訊くのかい」

才賀は意地悪く返事を濁して、徳島の反応を見た。
「拙いよ、これは。やめてくれよ」
「何故ですか、理由は」
「困るなあ」
徳島は、言葉の第一拍が悲鳴のように昂った、甲高い声を挙げた。
「理由なんて言われても、君、困るよ。わかるだろう、こういう問題を扱うのは拙いよ」
才賀は徳島が理由の筋道を立てる間、微笑しながら待った。同じ社会部の石本恒平は、半年前に番組のなかで、国歌として『君が代』をどう思いますかという街頭インタービューをし、放送後、右翼団体から執拗な抗議を受けた。放送された番組に対する抗議は、さまざまな形である。つい二カ月前にも、同じ社会部で、千秋恭介の作った『わが愛・北海道』に、番組の提供スポンサーから、未熟だというクレームがついた。
「この問題を扱うのなら、それだけでひとつの番組を作る時でなければ出来ないし……」
「そんな番組を作る筈がない」
「わかっているんじゃないか、威かすなよ」
才賀は鉛筆を取り上げ、消し忘れていた項目を改めて抹消した。
「あなたの希望に従い、この質問はやめましょう」
「頼むよ」
徳島はほっとしたらしく、その反動で他の項目はろくに見ずに、おもしろい番組になりそうじゃないか、と言って去った。
才賀は徳島とのやりとりを律子に話しながら、カメラマンの唐橋が第一議員会館前での別れ際に話があると言ったのは、数日前に発令された人事異動に関してではないか、と気づいた。徳島昭二は副部長から部長に昇格し、石本恒平はニュース編集部へ、千秋恭介は番組の制作とは全く関係のない編成局管理部への転出を命じられたのである。
才賀の説明が終ると、律子は再び声を立てずに笑った。
「つまり、表面上はテレビ局の、実質的には才賀さん個人の、自主規制というわけですね」
高梨孝三郎のための原稿を書くか、私家版のリーダーズ・ダイジェストを作っているかで、常に室内に閉じ籠っている彼女の白い顔は、眼を細めて笑うとある種の能面に似ている。才賀がそう思った時に、五〇二号室との間の扉が大きく開き、その空間いっぱいに高梨孝三郎が現われた。才賀を認めると、「よう」と太い声で肯く。才賀が立って彼のデスクをあけると、「いいよ、いいよ」と言いながらも、入れ替って椅子いっぱいに坐った。

高梨孝三郎に会うと常に、レストランでステーキを註文して予想より大きいステーキがレアの状態で出て来たような気が、才賀はするのだ。厚い体を、血色のよい赤い肌が包んでいる。

律子は自分のデスクの横にあったスツールを出して才賀に勧めながら言った。

「才賀さんは、例のインタービュー番組が終了したそうです」

高梨は曖昧に肯く。

「三十歳以下の、二代目さんを相手にした番組です」

彼女がさらに補足すると、「ああ、あれか」と高梨は初めて明確に肯いた。

「御存知でしたか」

「うん、聞いている。政治番組としてはおもしろい企画だと思う。二代目代議士というのは、年齢的にはひどく若く、それでいて世襲という中世的な発想の上に立っている珍種だからね。外向きには新しいことを言いながら、選挙区では地方の新興宗教と結びついていたりする。父親の生活を受け継いでいるからだろうが、ヘルスセンターで折詰を配る選挙戦術に照れ臭さを感じない青年たちさ」

「てきびしいですね」

「なかには、池田洋平のように親より出来るといわれているのもいるがね。彼が三十を過ぎていて、君の番組の対象にならないのは残念だ」

高梨孝三郎が話をはぐらかした時に、扉が開いて秘書の一人が電話のかかって来たことを告げた。高梨はデスクの上の電話機を引き寄せて切り換えさせると、両肘を突いた姿勢で受けた。長い電話であったが、高梨自身は殆ど何も言わない。閉じた唇を軽く尖らせて、低く肯くだけである。それでも最後に、「いろいろあるものだな」という言葉で、電話の彼方の報告者を犒った。

高梨が送受器を置くのを待って才賀が立ち上ると、思いがけなく高梨は手を挙げて才賀を制止した。

「君は、社会部だったね」

肯きながら才賀は、高梨への今の電話がどこかで自分に関連していたのではないか、という気がした。

「君は、千丈ヶ原の取材には行かなかったのか」

東京の近郊千丈ヶ原には、新しい空港が公団の手で建設中である。地元の団体と反戦青年委員会が建設に反対して、この日、一九六×年三月十日には、千丈ヶ原の市営球場で反対集会が開かれている筈であった。

「私は例の、インタービュー番組を作っている最中ですから。しかし、社会部から他の班が行っています。ニュース取材部と合わせると七八十人ぐらいは行っているでしょう」

「七八十人？　そんなに行っているのかね」
高梨は声を高めた。
「何か起きたのですか」
「君には関係なさそうだ」
高梨は事件が起きたことは否定しなかったが、才賀の質問は拒絶した。一度拒否すると、重ねて問いかけさせない圧力を、高梨は相手に与える。年齢、経験、そして職業的な錬磨と地位が、高梨を鎧うのである。

翌朝、唐橋弘からの電話で起された才賀は、約束した十二時を七八分過ぎて、六本木の中華料理店に入った。唐橋は一人ではなかった。才賀より一年上の同じ社会部員稲富周一と、長方形のテーブルの片側に並んで坐っていた。
「何にする。俺たちはもう註文した」
稲富はメニューを才賀に向けた。才賀が白いベストを着たボーイに註文を終えると、唐橋が彼独特の嗄れた声で言った。
「才賀さんは、今度の千秋恭介の管理部への転出をどう思っていますか」
やはりその話か、と思いながら、才賀は慎重に口を噤んだ。数日前に発令された人事異動は、全社的には百名を越えた。報道局社会部での異動は五人である。部長の高崎政太郎が報道局付の、いわば無任所の部長として部を離れ、後任には副部長の徳島昭二、副部長には部員から足立雅彦がそれぞれ昇格した。そして部員からは石本恒平がニュース編集部、千秋恭介が編成局管理部へ転出したのである。
才賀は唐橋を見返した。千秋恭介の社会部での仕事には、殆ど常に彼がカメラマンとして参加している。千秋が番組の制作部門から事務部門に移されるのに反対するというのか。しかし、企業内の人事異動について、同僚の希望にどれだけの意味があるのか、それに千秋自身はどう受け止めているのか、と考えると、才賀は迂闊に口をきけないという思いに陥ってしまう。
彼は逆に訊き返した。
「君はどう思っているのだ。人を呼び出して訊く以上は、そちらにも心づもりがあるのだろう」
ボーイが三皿の料理とスープを唐橋と稲富の前に運んで来た時でもあって、唐橋は沈黙した。改めて、「何から話をしたらいいのかな」と稲富に相談する。稲富はスープを飲み出した手を休めてちょっと考えたが、「俺がしようか」と唐橋に代った。
千秋恭介が編成局管理部勤務を命じるという通達を受けたのは、それが社内に掲示された三月六日の夕刻であった。病気で休んでいた千秋の自宅に電話して来たのは、同時に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

社会部長に昇格した徳島である。千秋が番組の制作部門から事務部門に転出させられる理由を訊くと、徳島は、理由については末端の管理職である自分にはわからない、会社からの通達として連絡するだけだと答えた。千秋は、それでは納得出来ない、と異動を拒否した。

するとその日の夜、千秋の家に、報道局長の今津忠男が、社会部長から報道局付の部長に転出した高崎政太郎を伴って訪ねて来た。風邪の為に三十八度を越す熱のあった千秋に対して、今津と高崎は寝たままでいいと言ったが、千秋は寝間着から服に着替えて、二部屋しかないアパートの一室で今津と高崎を迎えた。その夜交わされた会話の九割までは今津の饒舌が占め、残り一割の半ば以上が高崎、千秋は茶を勧めた後すぐ隣室に退いた彼の妻と同じ程に寡黙だった。

今津は、入社以来十年間一貫して番組制作の現場にいた千秋を事務職場に移す今回の異動は、局長である彼にとっても意外であり、本意ではないと最初に言った。千秋が黙っていると、編成局管理部に勤務するのは極く短い期間だと思う、もし希望するのならば一年後に必ず再び報道局に引き取る、と言い加えた。千秋が黙り続けると、高崎が傍から、彼自身も社会部長から報道局付の部長に異動させられた被害者で、担当する部のあるなしでは部長手当も五千円ちがう、サラリーマンとしては不本意な異動でも時には黙って受けざるを得ない、と千秋をなだめた。

「千秋はね、ドラマの取調室の場面のような気がしたそうだ。今津がわめき役、高崎がぼやき役」

千秋は入社以来ほぼ八年間、制作局でテレビドラマを作って来た。報道局に転じたのは二年前である。制作局時代には、警視庁捜査一課の刑事たちを主人公にしたドラマを担当したこともある。取調室の場面では、怒鳴る男と慰める男と、必ず硬軟一組の刑事が登場した。

稲富は忙しく食べ、滑らかに語った。彼は健啖家らしい切れの大きな薄い唇を持っている。才賀にも註文した料理がとどいた。彼は黙って、専ら聴き役になって食べた。

入社以来十年間番組制作の現場で働いていた人間が、何故突然に事務部門に移らなければいけないのかという千秋の質問に対して、今津は、役員からの指示で彼自身も不本意だし申し訳ないと思っていると繰り返した。代償のつもりなのか、今回素直に辞令を受けてくれれば必ず一年以内に報道局に引き取る、と彼は重ねて約束した。しかし千秋は、そうした先の約束よりも、異動の理由を明らかにして自分を納得させて欲しいと答えた。管理部に転出しなければならないのならば、個人の希望は別として、社員として納得して行きたい、それに、役員からの指示で彼自身も本意ではないと言いながら部下を転出させなければならない

立場の人間の、一年先の約束は信じられないと千秋はつっぱねたのである。

稲富の話を聞いて、才賀はふたつの感想を持った。

これまでの人事異動では、発令のほぼ二週間前までには本人に内示されるのが慣例だった。社内に掲示発表されてから本人が知った。しかも、担当の局長がそれまでの直属部長を伴い、理由らしい理由を持たずに本人の家に説得に赴いたというのは異例である。そしてもうひとつの感想は、千秋の芯の強さだった。地方高校の野球部の監督でもしたら似合いそうな、肌の荒い大柄な肉体を持った今津と、文学サークルに参加しても目立たぬ存在の学生といった印象の千秋との対話が、千秋の拒否で終ったというのは、外見とは関係のない人間の本質的な強弱を、才賀に考えさせたのである。同じ立場に置かれた時に、辞令を拒否し得るだろうかと考えると、自分にはその強さはないと才賀は認めざるを得ない。

稲富の話に一区切りつくと、唐橋は食事の手を止め、乾いた咳を数回繰り返してから言った。

「何故、行く先が管理部かということは別として、社会部を出された理由は明白です。『わが愛・北海道』にスポンサーからクレームがついた為です」

『わが愛・北海道』は、社会部内の各ディレクターが順番で制作に当っていた『青春の旅』というシリーズ番組のなかのひとつで、ディレクター千秋恭介、カメラマン唐橋弘のコンビで作られた番組である。短い、時には殆ど一秒あるかなしかのカットを繋ぎ重ね、その上に、そうしたモザイクめいた画面とは無関係な、一人の少女の旅に関するモノローグを流した作品であったが、放送後スポンサーである化学薬品会社から、旅行案内にもなっていなければ、北海道を背景にした青春ドキュメントにもなっていない、というクレームがついた。広告代理店の担当者を通じての話では、化学薬品会社の宣伝課長は、担当ディレクターが大阪まで来ればテレビ番組の商品価値について講義してやる、とまで言ったという。

「あれはしかし、高崎さんがスポンサー側に謝って、あの時点で蛇のついた話だった筈だ」

才賀が確認すると、唐橋がこれだけは一言言わせて貰うという態度で言った。

「謝る必要はなかったのです。『青春の旅』が始まる時、単なる旅行案内ではなしに、社会部制作の番組らしいドキュメンタリーにしよう。単なる旅行案内ならば、制作局の教養部あたりが作ればいい。報道局で作る以上は、各自が考えた旅というイメージを映像化しよう、というのが副部長として徳島さんが示した方針でした。その意味で、千秋

さんの作品には、千秋さんの旅のイメージがはっきり出ている。報道局の一契約カメラマンで、正式の社員ではない僕が言うのはおかしいかも知れないけれど、大体、高崎さんという人が小心で、上から叱られたりスポンサーからクレームがつくと、ただ平謝りに謝るだけなのが、ますます事態を悪くした。僕は個人的な関係で知っていますけれど、スポンサーのクレームにしても、本当は作品としての優劣の問題ではなしに、僕たちとは関係のない、スポンサー側の宣伝効果の次元での不満だった」

その話は稲富にとっても才賀にとっても初耳だった。二人に瞋められて唐橋は大きく咳をし、息を整えてから説明した。化学薬品会社の広告代理店側の担当者は、唐橋が報道局の契約カメラマンになる以前に働いていたプロダクションでの、同僚だった。彼の話によると、化学薬品会社が『青春の旅』の提供を決めた当初は、同社の廃水浄化装置の宣伝の為であったが、放送が開始される直前になって新しく発売した若い女性を対象とした化粧品の宣伝に変更された。その為、化学薬品会社の宣伝課は、若い女性が気楽に見られる美しい風景や珍しいお祭りを撮影した観光旅行案内への企画変更を狙っていた——

「今さらそう言われても、どうしようもないな」と稲富は唐橋の話を遮った。「とにかく、俺たちにも責任はある。高崎が責任をすべて千秋に押しかぶせて休養を命じたのを、俺たちは何となく見過していたのだから」

才賀にとっては、その稲富の言葉も、初めて聞く内容であった。

「千秋は風邪で休んでいたのではないのか」

「今は風邪で寝ている。しかし、初めは仕事からはずされ、高崎から休めと言われて休んだのだ。そうしたら却って風邪をひいた。千秋の休養については、部会の時に高崎が、スポンサーからのクレームもあって暫く千秋を休ませるが、これ以上の懲罰的な処置、たとえば社会部から転出させるなどということは絶対にしない、と約束したではないか」

「知らなかったな」

「知らなかった？」

稲富と唐橋は、意外だという表情で才賀を見た。

「先月は明治百年記念の番組で山口に行っていた。その後すぐ、今度の番組で、最近部会に出ていない」

稲富と唐橋は沈黙した。

「それで、高崎さんの部会での約束を楯に、千秋の異動撤回の運動を起すのか」

才賀は二人が同時に肯くのを予想していたが、意外にも稲富は曖昧な表情で首を傾げた。

「結果はそうかも知れないが、理由は少しちがう。高崎の

部会での約束などは問題として小さい。更に上級の報道局長が千秋の異動に対して意外だとか不本意だとか言っている現在、一部長の約束など問題にしても詰らない。論点はひとつだ。入社以来一貫して番組制作の現場で働いて来た人間を、所属の局長が不本意だという状態で、事務部門に移す理由は何か。番組制作に不適当と見做されたのか。個個の番組の評価と異動とは関係があるのか。一千秋個人に限らずに、今回の人事異動の理由を会社に糺すべきだ」

この時、才賀は稲富の言葉の、隠されている部分に気づいた。

「おい、一千秋個人に限らずというのは、石本さんのニュース編集部への異動も含めて、という意味か？」

「実はそうだ」と稲富は肯いた。「石本が社会部のいわゆる企画畑からストレート・ニュースに移されたのは、もちろん『君が代』の為で、俺個人の意見を言えば、本質的には千秋と同じ懲罰人事だと思う。しかし、事務部門に移された千秋とちがって、石本の場合は同じ報道局内の異動で、はっきり懲罰と言えるかどうか曖昧な形になっている。また、末梢のことだが、千秋とちがって本人が辞令を受け取ってもいる。それに、石本はああいう態度の男だし、人気がない。千秋の場合、彼が異動を拒否するのならば、社会部の殆ど全員が支持するだろう。しかし、石本ぐるみの話になると、三分の一ぐらい落ちる」

石本の企画のたてかたはセンセーショナリズムに毒されている、自己顕示欲が強いという評は、才賀も耳にしている。しかし、才賀は、本質的には懲罰人事だという、稲富の言葉をも認めていた。個人的な親疎や好悪は別として、石本恒平のニュース編集部への転出には懲罰の要素が潜んでいる、と才賀は感じているのである。才賀より三年年長の、三十七歳という年齢から見ても、前年に芸術祭参加番組を制作し奨励賞を受賞している経歴から考えても、突然に、内示もなしに異動させられたのは千秋の場合と同様に不自然だった。

同じ日の発令で副部長に昇格した足立雅彦は石本と同年齢である。ラジオによる民間放送がこの国に出現して二十二年、テレビが二十年、それだけに才賀たちの社内でも高年齢層の社員の職歴は雑多で、それを一律に評価する難かしさから考えても年功序列による判断は一応の目安にしかならなかったが、番組制作者としては凡庸であった足立の昇格と一応の成果を挙げて来た石本の転出は、才賀の眼にやはり均衡を失した人事に見える。だが、企業内の人事異動について、同僚に過ぎない立場からどれだけの抗議が出来るのか。

才賀が考え込むと、稲富は誘い込むように言い加えた。

「石本の転出は、本質的には懲罰だが、具体的な争点はぼかされている。『君が代』の為だと言っても、会社は番組の評価と異動とは関係ないと否定するだろう。しかし、千秋の場合は、正面から抗議し得る。入社以来十年、番組制作の現場で働いて来た人間を事務部門に移すのに際して、所属の最高責任者である局長が、俺も残念だ、では諒承出来ない。本人が飽くまでも辞令を拒否するのならば、俺たちも一致して支援してやりたい。どうだろう」

才賀が黙っていると、「抗議運動を起したら参加してくれるか」と繰り返した。

才賀はこの日の稲富と唐橋の話を最初から検討し、抗議運動が起されるのならば、参加してもいいと決心して肯いた。稲富は間髪を入れずに念を捺す。「いいよ」と才賀は声に出して答えたが、声を出したことで、心の蔭に潜んでいる不安がまたしても高まった。企業に属している者の不安、あるいは懼れというべき感覚かも知れない。人事に関して、社員はどこまで経営者に抗議し得るのか。

才賀が訊ねると稲富は沈黙したが、やがて、「才賀さん、あんた、今いくつだ」と問い返して来た。

「三十四」

「大学を出て、いきなりここか」

「いや、前に広告代理店にいた」

「俺や君の世代がいちばん中途半端なんだ。実は、俺にもそんな不安がある。サラリーマンの社会では、人事権は経営者側が握っている権利ではないかという考え方だ。これが俺たちよりさらに三つ四つ上の、新垣や石本あたりになると、人事に関しては社員は会社側と争えないと思い込んでいる。だから、納得がいかなくても、石本は辞令を受け取った。ところが、俺たちより下の連中は、会社側の絶対的な権威など認めていない。民間放送とは何かという視点に立てば、一般企業のルールとは別の考え方があり得ると主張する」

「権威は認めなくても、力は認めざるを得ないだろう」

すると稲富は才賀の顔の前に手を挙げて、話の進行を中断するポーズをとった。

「それはちょっと待とうよ。それを言うと、勝つか負けるかという力の予想になる。まず今は、人事異動の基礎になっている理念は何かを、会社側と話し合うべきだ。会社は経営的側面からしか放送を考えていない。それだけに、スポンサーからのクレームに端を発した千秋の異動は懲罰ではないのか、石本の『君が代』を番組としてどう評価するか、その辺から突いて行けば、五分以上に戦える筈だ」

「いいですか」

話が落着くのを待っていたらしく、唐橋が口をはさんだ。

「僕は稲富さんや才賀さんのような正規の社員ではなくて、一年毎に報道局と契約を更新しているカメラマンですから、サラリーマンと一口に言われる職業が、本質的にはわかっていないのかも知れません。しかし、今度のような人事異動で千秋さんが理由を糺すことも出来ないのだとしたら、企業に所属している点について、稲富さんも才賀さんも自分の人生をもう一度考えるべきだと思います」

「わかったよ、お前」

稲富は唐橋の肩を叩いて宥めた。

「婦人雑誌の人生論みたいなことを言わなくてもいい。俺には俺の怒りがある」

稲富の言葉に険しさを感じて、才賀は訊き返した。

「怒り？　稲富さんの怒りとは何かね」

すると稲富は口籠り、不用意に口を滑らせたが、それについては訊かないでくれ、というかのように才賀に頭を下げた。

「今日は待ってくれ、いつか機会を見て説明する。今度のような異動がなかったとしても、俺は以前から、人事に関して一度会社にクレームをつけてやろうと考えていた」

食事が終ると、稲富は寄り道をすると言って姿を消した。才賀は唐橋と二人で、六本木から社まで歩くことにした。呼吸器官に疾患のあるらしい唐橋は、何十歩目かに大きく深呼吸しながら黙って歩く。才賀も自分ひとりの思いに口を閉ざして歩いた。彼が考えていたのは、稲富の言う〝怒り〟についてである。人事という抽象的な問題に関して、〝怒り〟という言葉を使うからには、何か具体的な対象があるのではないか。その対象とは、報道局長の今津忠男ではないか。そう考えた才賀の心に、ふたつの記憶が浮んだ。

千秋恭介が社会部に転入して来たのは、二年前の三月であったが、その一二週間前に、才賀は彼と社の近くの小料理屋で出会った。

才賀さん、独りですか――

彼は才賀に伴れがいないのを確かめると、カウンターに並んで坐ってから、社会部はどんなところですか、と問いかけて来たのである。

来る気かい――

フィルム・ドキュメンタリーを作ってみないかと言われているんです。僕は今までスタジオ・ドラマしか作っていませんから、ちょっと気を惹かれるけれど、社会部の管理職がどんな人間か知らないから、迷います――

彼が迷いますと言うと、いかにも頼りなげに聞えるのだった。彼の目鼻立ちや口許が顔の輪郭に比して小作りな為ではないか、と才賀は考えた。肌が白い為もあって、千秋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com